

## 「鷗外の手拭、北里の大風呂…清潔と近代」

福 田 眞 人

「キーワード」森鷗外、北里柴三郎、清潔、風呂、垢、手拭

はじめに

日本人の風呂好き、入浴好きはよく知られている。それは、日本が夏期に高温多湿で、垢が付き易く、しかも汗や垢を放置すると皮膚が腫れやすかったからではなかったか。しかし、それが日本人全体にあまねく広がった習慣であったのかどうか、そのことを近代の中で確かめてみる事は重要であろう。と言うのも、古代、中世、近世、近代において風呂の記述は必ずしも豊かではなく、また時に曖昧であるからだ。入浴の習慣もまた、その意味が曖昧であることが少なくない。本論では、その全体像を見晴らすこととよりも、むしろ個別の事象を見ながら、歴史を遡る作業のところがかりとしたい。

その意味で、森鷗外（一八六二—一九二二）、北里柴三郎（一八

五三—一九三二）という近代の医学、衛生学における大家を取り上げて、その記録の中に風呂、入浴の形態を探る事はおおいに意義があるであろう。この二人の同業者、医師にして生涯衛生問題に関わった二人は、その風呂への態度、衛生観念、生活意識を俯瞰すると、東大を出、ドイツへ留学した二人は軌を一にするかに見えて、実は意外に乖離していることに驚くだろう。

また鷗外の周辺に居た人士として、夏目漱石（一八六七—一九一六）がおり、また正岡子規（一八六七—一九〇二）がおり、さらに漱石の弟子の芥川龍之介（一八八二—一九二七）がいた。彼らの、風呂に対する姿勢から、清潔の問題を論ずるのは興味深いものがある。

そこでは、現代の日本からは遊離した清潔の観念や、また風呂の使用方法があったことも分かってこよう。清潔とは何か、という問題をわれわれに突きつけてくる筈である。

## 1 入浴ということ

まず最初に、ある日記を見てみよう。その記述は、決して短くない。しかし、その中に連日判で押したように現れて来る表現がある。それは入浴である。(他の部分は省略)

八月二十七日 五時ごろ入浴。

八月二十八日 五時ごろ入浴。

八月二十九日 五時ごろ入浴。

八月三十日 四時に入浴。

九月二十五日 午後散歩、帰りて入浴。

九月二十六日 いつもゆく御園湯といふ湯屋は廿六日が休日であるので、けふは目白駅の向ふの湯屋へゆく。郊外発展につれて、どこの湯屋もみな案外に綺麗になった。(1)



図1、岡本綺堂

これは、『半七捕物帳』などで、当時すでに人気作家となっていた小説家岡本綺堂(一八七二—一九三九)の日記である。十七歳で毎日日記をつけ始めて

以来、この年まで三十五冊にわたって日記を書き続けてきた岡本は、この年一九二三(大正十二)年の九月一日午前十一時五十分分に起こった空前絶後の大地震(関東大震災)によって、自宅を焼失し、同時にその日記のすべては灰燼に帰するのである。岡本は、あまりの消沈ぶりで、日記ももうやめようかと考えるが、思い直してまた九月二十三日から書き始めたのである。それが、この八月末から九月末までの日記の空白部分である。

ここで単調に書き留められている「入浴」の文字、その日々変わらない行動は、しかし、今日の我々から見ると自宅の風呂での入浴のように見えるが、その実、町の銭湯での入浴であった。それが九月二十六日の記述でようやく明白になるのである。

江戸時代におおいに賑わった銭湯(関東では「銭湯」、一方関西では一般に「風呂屋」と呼ばれてきた)は、実は江戸幕府の政策で、個人の家庭で家風呂、あるいは内風呂を自由に持つことができる、それはまた燃えやすい日本家屋の特徴そのままに、江戸市中が火事騒動を被ることになるので、侍屋敷以外は大概禁止にしていたためであり、また庶民は庶民で、自家に内風呂を建てるとなると相当の経費が嵩み到底堪えられないものとも思われる。

しかし、江戸っ子は、なにがなんでも銭湯に行つて、滑稽なことに熱い湯を辛抱して頑張るのである。それが面白可笑しく描か

れたのが、式亭三馬の滑稽本の名作『浮世風呂』（文化六年〜十年、一八〇九―一三）である。

欲垢と梵悩と洗清めて浄湯を浴れば、且那さまも折助も、孰が孰やら一般裸体。是乃ち生れた時の産湯から死だ時の葬灌にて、暮に紅顔の酔客も、朝湯に醒的となるが如く、生死一重が嗚呼ま、ならぬ哉。

されば仏嫌の老人も風呂へ入れば吾れらず念仏をまうし、色好の壯夫も裸になれば前をおさへて己から恥を知り、猛き武士の頸から湯をかけられても、人込じやと堪忍をまもり、目に見えぬ鬼神を隻腕に雕たる俠客も、御免なさいと石榴口に屈むは銭湯の徳ならずや。心（こゝろ）ある人に私あれども心なき湯に私なし。(2)

こうした、身分の上下さえお構い無しで、ごちゃごちゃの銭湯のような江戸情緒の残っていた明治時代の東京では、江戸時代の銭湯を懐かしむ声が少なくなかった。たとえば、岡本綺堂は、自宅の内風呂を持つ以前は、冒頭で見たように毎日のように外の銭湯に行き、その記録を日記のように記していた。そして、一九三八（昭和十三年）年の『明治時代の湯屋』という随筆に次のように書いた。

日清戦争の頃から湯屋を風呂屋という人がだんだんに殖えて来たのを見ても、東京の湯屋の変遷が窺い知られる。もちろん遠い昔には丹前風呂などの名があつて、江戸でも風呂屋と呼んでいたらしいが、風呂屋の名はいつか廃れて、わずかに三馬の「浮世風呂」にその名残りを留めているに過ぎず、江戸の人は一般に湯屋とか銭湯と呼び慣わしていた。それが東京に伝わつて、東京の人もやはり湯屋とか銭湯とか呼ぶを普通とし、たまに風呂屋などという人があれば、田舎者として笑われたのであるが、この頃は風呂屋という人がなかなか多くなつた。やがては髪結床を床屋、湯屋を風呂屋と呼ぶのが普通になるであろうと云っていると、果してその通りになつた。(3)

言葉の変遷はいつの世もならいで、時に同じことばでも意味が変わることがある。「床屋」と「風呂屋」が明治の当初まで野暮な言葉であつたとは面白い。「風呂屋」の代わりに「銭湯」と「湯屋」が一般的であつた事はこれでも知れる。

湯銭は八厘から一銭、一銭五厘、二銭と、だんだんに騰貴して、日露戦争頃までは二銭五厘に踏み留まっていたが、場末には矢張り二銭というのもあつた。ほかに「留め湯」とか「月留め」とかいう制度があつて、毎日かならず入浴する人に対して

は割引をする。それも最初は一ヶ月前金十銭ぐらいいであったが、湯銭騰貴に伴って、二十銭、二十五銭、三十銭となり、湯銭二銭五厘の当時には五十銭となった。又、朝夕二回入浴する人に限って、朝湯は一ヶ月十銭ぐらいいに割引するのが普通であったから、職人などは勿論、入浴好きの人々は朝と夕とに二回の入浴をするのが多かった。

朝湯は大抵午前七時頃から開くのであるが、場所によっては午前五時半か六時頃から始めるのもあった。それを待ちかねて、楊枝をくわえながら湯屋の前にたたずみ、格子の明くのを待っている人もある。男湯に比べると女湯は遅く、午前九時か十時でなければ格子を明けなかった。その朝湯を廃止することになったのは大正八年の十月で、燃料騰貴のために朝から湯を焚いては経済が取れないと、浴場組合一同が申合せて朝湯を廃止したのである。(4)

江戸っ子<sup>(5)</sup>の朝湯、小原庄助さん(会津磐梯の民謡「会津磐梯山」に登場する人物)の朝寝、朝酒、朝湯はこのようにしてその姿を消さざるをえなかったのであろうか。それが経済的理由となると、宵越しの銭を持たないとした江戸っ子にはいっそう堪えた事であろう。明治期の物価の騰貴は凄まじいものがあつたようである。

岡本はさらに続けて、江戸情緒ということを読み解いていく。

「浮世風呂」などにも湯屋の二階のことが書いてあるが、三馬時代の湯屋の二階番は男が多かったらしい。江戸末期から若い女を置くようになって、その遺風は東京に及び、明治の初年には大抵の湯屋に二階があつて、男湯の入口から昇降が出来るようになっていた。そこには白粉臭い女が一人又は二人ぐらいい控えていて、二階にあがつた客は新聞や雑誌をよみ将棋をさし、ラムネを飲み、菓子をくい、麦湯を飲んだりしていたのであるが、風紀取締りの上から面白くない実例が往々発見されるので、明治十八年頃から禁止された。矢場や銘酒屋を許可しながら、湯屋の二階だけを禁止するのは不公平だという議論もあつたが、湯屋が本業である以上、副業の二階を禁じられても公然の反対は出来なかつたので、湯屋の二階はここに亡び、「湯屋の姐さん」という名称も消滅した。(6)

こうして、銭湯に名物の湯女は消えたのである。それは、売春という活動が公然と行われていたことに対する風紀取締の結果であつた。江戸時代から繰り返して来たことに対する風紀取締の結果でされていたのだが、しぶとい庶民は、歓びの為に、また風呂屋は儲けのために、そうした幕府の抑圧を体よく躲かしていたので

ある。なお、ここで「麦湯」とは麦茶のことで、日本では平安時代から貴族の飲み物として愛飲され、それから江戸時代には夏の風物詩となったもので、麦茶売りの娘も、その店頭の行灯も、街頭を彩った。

江戸時代には自宅に風呂を設けてある家は少なかった。内風呂は免かくに火災を起し易いからである。武家でも旗本屋敷は格別、普通の武士は町の湯屋へゆく。殊に下町のような人家稠密の場所では内風呂を禁じられていたので、大家と云われるほどの商家の主人でも、大抵は銭湯へ入浴に行った。明治以後はその禁制も解かれ、且は地方人が多くなった為に一時は内風呂が頗る流行したが、不経済でもあり、不便でもあるといっているので、明治の中頃からは次第に廃れて、大抵は銭湯へ行くようになった。大正以後、内風呂がまた流行り出して、此頃は大抵の貸家にも風呂場が附いているようになったが、それが又どう変わるか判らない。<sup>(4)</sup>

このように銭湯も流行り廃れがあり、それからは大変遷を経て、今日の「朝シャン」(朝シャンプー)にまで至ったのである。人々は、清潔を求めて風呂屋に通ったが、こと経済問題、安全問題となると別問題で、なかなか自宅の風呂である内風呂にまでは行き

着かなかったのである。戦後の日本の高度経済成長、核家族化、都会への人口集中がこのような個人風呂の世界を現出させた。そこから、さらに清潔に対する好みは進み、その結果、「朝シャン」というところにまで事態は進んだのである。おそらくそれは清潔の過剰なのであるが、その病理はなかなか理解されないとこまで来た。(何度も手を洗わないと気が済まないのは、明らかに精神状態に問題がある。)

そこにある問題とは、清潔が、臭いの無い、脂気の無い、そのような存在への憧れであり、その結果、洗い過ぎの問題、つまり髪の毛の傷みが生ずるような事にもなったのである。(朝の忙しい時間にシャンプーという問題はまた別の事象である。)

(5)

## 2 風呂とシャンプー

今日、風呂という言葉は、日本ではごくありふれた言葉として用いられている。関連語句として、風呂屋、風呂場、風呂桶、風呂釜、風呂敷などが考えられよう。

そうした中で、意外と知られていないのが、「風呂」という言葉が、中国語には存在しない語彙であり、中国語ではないということである。

しかし、この語を見て現在の我々が読む上でにわかに分からないのは、これがどのような形態の風呂であるか、ということであ

る。外にある銭湯なのかはたまた家にあるいわゆる内風呂なのか。しかし、日本の風呂の歴史を繙けば、興味深い事象が目白押しであろう。むしろ、風呂に関してはその起源から展開、利用者の階層など、不明の点が多いのが難点である。つまり、風呂の歴史を簡単にたどれないし、また大括りで述べる事ができない事象なのである。

たとえば、日本における風呂の起源と言うことになると、もちろん原始時代、泉や川や海で水浴した人たちがその原初ということになる。そうした人たちの記録を求めるのは困難であるし、またその正当性を裏付けるものは何も無い。

「風呂」と称しても、元来「釜で湧かした湯の蒸気を浴槽内に送り込み、身体を浮かす方式」であったことを考えると、さらに入浴に関する他の漢字の意味はいろいろあって、例えば「沐」は頭から水をかぶることを意味し、「浴」は水あるいは湯に浸かることを意味した。すると、「沐浴」という言葉自体、すでに同一の事を意味していたわけではない。

それどころか、「湯」という言葉自体、「今日一般の家風呂、銭湯のような浴槽に張った湯に身体を浸ける方式」を意味するのであれば、「風呂」と「湯」自体がすでに異なる意味を持っていた事になる。(さらにややこしい事には、これが中国語に対応しておらず、中国語では、風呂は「洗澡」といい、シャワーは「淋浴」

と言う。さらに「湯」とは、まったく別の意味、料理の「スープ」になる。)

ここで、日本の風呂の歴史を概観しておこう。風呂は、どうやら「岩風呂」(岩窟中蒸気風呂)に始まるらしい。岩窟の中で立ち込める蒸気を利用して汗を掻き、それで身体を擦るなり何なりして身体を淨めたものが初めらしい。

六世紀、中国から仏教が伝来すると、入浴が奨励された。入浴が、「七病退け、七福を招来する」との教えによるものである。

勿論、寺院での大切な行の一つが「沐浴齋戒」(身体を洗い淨める)であり、これを行う「浴室」という施設が大概附属していた。例えば、東大寺では大湯屋が置かれ、それは「鉄湯船」と呼ばれたが、その容量たるや二〇〇〇〜三〇〇〇リットル位あったらしい。

そして寺院では、単に僧侶の行のためだけでなく、俗世の人達の中でも貧しい人・病人・囚人らを対象として「施浴」も積極的に施行したのである。

ここで、「七病」と「七福」について見ておく必要がある。

七病

一者、四大安隠 二者、除風病 三者、除湿痺 四者、除寒水  
五者、除熱氣、六者、除垢穢 七者、身体輕使、眼目精明

七福

一者、四大無病、所生常安、勇武丁健、衆所敬仰  
二者、所生清浄、面目端正、塵水不著、人所敬仰  
三者、身体常香、衣服潔浄、見者歡喜、莫不恭敬  
四者、肌体濡沢、威光得丈、莫不敬嘆、独歩無双  
五者、多饒人從、扨拭磨垢、自然受福、常識宿命  
六者、口齒香好、方白齊平、所説教令、莫不庸用  
七者、所生之処、自然衣裳、光飾珍宝、見者悚息

〔『大正蔵』一六卷、「佛説温室洗浴衆僧經（温室經）」〕

一二三二（寛喜三）年関白藤原道家親子、別荘に有馬の湯を、毎日牛車で二百桶運ばせて入浴したという記録が残っている。（藤原定家『明月記』に記述あり）

やがて鎌倉時代には、寺社が一般人にも無料で風呂開放するようになった。しかし、荘園制度崩壊と共に領主の庇護とお布施を失ったので、入浴料を取るようになった。これが有り体に言えば、銭湯の始まりである。しかし、まだ銭湯とは名付けていなかった。

一二六六（文永三）年日蓮が四条金吾（四条頼基）宛の書簡で「御弟共には常に不便の由有べし。常に湯銭、草履のあたひなどあるべし」<sup>(8)</sup>と書いているから、「湯銭」という入浴料支払う銭湯の如きものが存在したことになる。ただしこれは寺の風呂である可能性が高い。

室町時代における京都の街中では入浴を営業とする銭湯が増えていった。このころ庶民が使用する銭湯は、蒸し風呂タイプの入浴法が主流であった。また、当時の上流階級の公家や武家の邸宅には入浴施設が取り入れられるようになっていた。公家の中には庶民が使う銭湯（風呂屋）を、庶民の利用を排除して時間限定で貸し切る「留風呂」と呼ばれる形で利用した者もいた。なお、室町時代末期の「洛中洛外凶屏風」（上杉本）には当時の銭湯（風呂屋）が描かれている。

一五九一（天正十九）年江戸最初の銭湯が、江戸城内銭瓶橋の伊勢与一によって開業された蒸気浴であった。この事は、寛永八年印本の『そぞろ物語』に見える。

見しはむかし江戸はんじやうのはじめ天正十九卯年の夏の此かとよ伊勢與一といひしもの銭瓶橋のほとりにせんたう風呂を一ツ立る風呂銭は永楽一銭なり皆人めづらしき物哉とて入給ひぬされども其此は風呂ふたんれんの人あまた有てあらあるの湯の雫や息がつまりて物もいはれず煙にて目もあかれぬなどと云て風呂の口に立ふさがりぬる風呂をこのみしが今は町毎に風呂ありびた十五銭廿せんづ、にて入也<sup>(9)</sup>

その後、江戸時代初期の江戸では浴室の中に小さめの湯船が

あつて、膝より下を湯船に浸し、上半身は蒸気を浴びるために戸で閉め切るといふ、湯浴と蒸気浴の中間のような入浴法で入る「戸棚風呂」といふものが登場している。

またその後、湯船の手前に「石榴口」といふ入り口を設けた風呂が登場することになる。細工を施した石榴口によって中は湯気が立ちこめ、暗く、湯の清濁さえ不分明。(盗難や風紀を乱すような状況が発生したのは肯ける。)後に、客が一度使った湯を再び浴槽に入れるという構造に。『湯屋漫歳曆』には「文政の末に流し板の間より汲溢れを取ることはじまる」との記述あり。

薬草を炊いて蒸気を浴びる蒸し風呂から、次第に湯に浸かる湯浴みスタイルへと大きな変化が生じたが、男女を別に浴槽を設定することは経営的に困難で、老若男女が混浴するのが常だった。

営業時間は朝から宵のうち(現在の夜の八時位)まで開店。浴場、銭湯が庶民の娯楽、社交の場として機能しており、落語が行われたこともある。特に男湯の二階には座敷が設けられ、休息所として使用された。式亭三馬『浮世風呂』などが当時の様子をよく伝えている。銭湯の入り口には矢をつがえた弓、もしくはそれを模した看板が掲げられることがある。これは「弓射る」と「湯入る」をかけた洒落の一種である。

江戸城「御殿湯」に、熱海の湯を大きな樽に入れて人足が担いで江戸城まで運ばれた。

内風呂を持てるのは大きな武家屋敷に限られ、火事の多かった江戸の防災の点から基本的に禁止されていた。江戸時代末期には大店の商家でも、経済的余裕と社会的地位の向上で、内風呂を持てるようになった。

### 3 混浴と湯女から近代銭湯へ

日本の風呂を語る時、しばしば混浴が問題とされるが、西洋の中世以降も混浴は盛んだった。容易に想像されるように、混浴は倫理問題をいつも孕んでいたし、また売春という問題と不可分であった。もちろんそこには、すでに述べた経費の問題、つまりいかに安く風呂を庶民に提供するか、という問題があつて、男女の区別を付けるということは、すべての設備が二倍必要だった訳で、湯槽一つで済ませられればそれに越した事はなかったはずである。ここではこれらの問題には深入りせず、簡単に歴史の変移を辿っておくだけにする。

すでに室町時代からその湯女という称号は知られており、次の『伊勢備後守定弥日記』で次のように書かれている。(10)

さるは此頃の風俗に。人を招きて燕楽する事を。風呂と稱したる物なり。風呂とは浴室の事。…(中略)…慶長以後はさかりに行はれし事とおぼし。我も人も風呂と稱して酒を饗するほど



に。道路に風呂屋と稱して酒をうる家いできたり。まろうど、も。まづ風呂に入て。浴後に酒をのむ事となりしとぞ。さて其家に女をすゑて。湯を出るときはかたびらを假し。酒になれば酌をとる。これを湯女といふ。此湯女つひに情をうるものとなりて。風呂屋は北里の名と轉じたり。紫の一もとに。麴町。紀の國阪に風呂やありといへるは。みな娼家の事にて。湯はありしやうにもなし。(ii)

江戸時代に混浴は「入込み湯」と呼ばれた。男女が同じ浴槽に漬かるのである。また、「湯女」というものも出て来た。その役割は、垢擦りや髪梳きのためのものだが、やがて飲食を共にすることの他に性的奉仕（売春）をするに至った。

この「湯女」の語源は、古く寺院浴場の管理人僧侶を「湯維那」と称し、略して「湯那」と呼び慣わしたことによる。やがて銭湯が普及すると、その主人の名称となり、男湯の世話女を「湯那の女」と呼び、略して「ユナ」となり、それに字を当てて「湯女」となった。

一六五七（明暦三）年、幕府は湯女一掃の禁令を出し、湯女を吉原遊廓に集めて遊女として、集中管理体制をひくこととした。売春行為が目に残るようになってきたので、ついに遊廓に一元化することにしたのである。そこで問題になったのは、あくまで風紀の管理と税金の問題で、売春そのものは是非が問われた訳で

はなかった。

一七九一（寛政三）年には、幕府老中松平定信の寛政の改革があり、「入り込み湯」厳禁とするとして、取り締まった。また、一八四二（天保十三）年には、幕府老中水野忠邦が、天保の改革で厳しく取り締まったが、死後すぐに湯女は復活している。混浴も禁止されたが、必ずしも守られなかった。江戸では隔日もしくは入浴時間を区切つて男女を分ける試みも行われたが、さしたる成果はあげなかったようである。

この馳ごっこは世が代わつても続き、ついに一八六九（明治二）年「男女入込み湯」禁止の通達を東京府が出している。

一七二二（正徳二）年に出た貝原益軒（一六三〇—一七一四）の執筆した『養生訓』は、本人が八二歳の時のもので、その巻第五で入浴と水、洗浴を取り扱っている。

湯浴は、しばしばすべからず。温氣過て肌開け、汗出で氣へる。古人、「十日に一たび浴す」。むべなるかな。ふかき盤たぶらに温湯少し入て、しばし浴すべし。湯あさければ温あたたかき過ずして氣をへらさず。盤ふかければ、風寒にあたらす。深き温湯に久しく浴して、身をあたため過すべからず。身熱し、氣上り、汗出、氣へる。甚害あり。又、甚温なる湯を、肩背に多くそそぐべからず。熱湯あつゆに浴するは害あり。冷熱はみづから試みて沐浴すべし。

快こころよきにまかせて、熱湯に浴すべからず。氣上りてへる。殊に目をうれふる人、こらへたる人、熱湯に浴すべからず。

暑月の外、五日に一度沐かみあひ、十日に一度浴す。是古法なり。夏月に非ずして、しばしば浴すべからず。氣、快といへども氣へる。

あつからざる温湯を少すく(し) 鹽たぐひに入て、別の温湯を、肩背より少しづゝ、そゝぎ、早くやむれば、氣よくめぐり、食を消す。寒月は身あたゝまり、陽氣を助く。汗を発せず。此如すれば、しばしば浴するも害なし。しばしば浴するには、肩背は湯をそゝぎたるのみにて、垢を洗はず、只下部げぶを洗ひて早くやむべし。久しく浴し、身を温め過すべからず。(12)

一八六九(明治二)年に「男女入込み湯」禁止の東京府達。これが、いわゆる岡本綺堂を嘆かせる江戸情緒喪失の始まりだろうか。

一八七七(明治十)年頃、東京神田区連雀町の鶴沢紋左衛門が考案した『改良風呂』と呼ばれる、石榴口ざくみを取り払って、天井が高く、湯気抜きぬきの窓を設けた、広く開放的な風呂が評判になって、現代的な銭湯の構造が確立した。

一八七九(明治十二)年に政府は石榴風呂式浴場を禁止で旧来型銭湯は姿を消し、外国への配慮から混浴は禁止としたが、銭湯

は都市化の進展や近代の衛生観念の向上とともに隆盛を極めた。この頃のことになると、また岡本綺堂の随筆が生々しくてよい。その一節を引くと、このようになる。

その頃の風呂には旧式の石榴口じゅうくちというものがあって、夜など湯煙ゆげが濛々として内は真暗まくら。加之その風呂が高く出来ているので、男女おんなにょともに中途の踏段を登って這入る。(13)

大正時代になると、銭湯はさらに近代化され、板張りの洗い場や木造の浴槽は姿を消し、陶器のタイル敷きの浴室が好まれていった。昭和時代になると、水道式の蛇口が取り付けられるようになった。(14)

#### 4 鷗外の手拭、北里の大風呂

こうした日本の、あるいは世界の風呂の歴史を眺めてみると、さて近代はいかに風呂を扱ったのかということは興味深い。さらに近代日本の医学・衛生学の二人の泰斗森鷗外と北里柴三郎を並べてみて、彼らの衛生観念、風呂そのものに対する態度を確認してみる事は意義深い。なぜなら、彼らには自分自身のみならず、一般庶民の健康を守る義務が課せられていたからである。それが、たとえ鷗外の場合には陸軍の軍医であっても、国民の一部である



図2、森鷗外



図3、北里柴三郎

ことにはなんら変わりはない。

二人のドイツ留学時期は、各々鷗外（一八八四―八七）、北里（一八八五―九二）であり、重複している。それも

そのはず、北里は鷗外を師コッホに紹介する労を取っている。それでは、二人の風呂に関する考え方、行動はどうであったのか。以下検討してみよう。

まず、鷗外の娘小堀杏奴（一九〇九―九八）の「思出」証言に耳を傾けてみよう。どうやら、鷗外森林太郎は、平生から風呂に入らない生活を送っていた模様である。

父は決して風呂に入らない。

これはどういう理由からか私は知らないが、一体がそう入浴好きでなかったのと、戦地での習慣がそうさせたものらしい。

笑談に「お茶の湯式」と称して湯を注いだりする順序なども決まっていたそうである。

私は父が使っていた競馬石鹸の空箱や、石鹸をくるんで赤い布などを貰って溜めていた。

近所の床屋を頼む事もあるが、大抵は母が自身で父の頭を刈っていた。髪の毛が軟いのでバリカンを使っても少しも骨が折れなかったそうである。

雲脂が多くて新聞紙を拡げてはブラシでよく落としていた。そして雲脂が多いのは頭を使う証拠だと自慢していた。<sup>(15)</sup>

ここには、鷗外の入浴習慣に関する情報がたくさん詰め込まれている。つまり、プロシア軍での経験がそうさせたのか、茶の湯の儀式のように格式張って、様式が整っていたらしい。それにその石鹸は大抵高級なものだった。たとえば蒲原有明（一八七五―一九五二）は、それについてこう書いている。

鷗外の精神はわたくしの生活のなかに微細な点にわたって影響を及ぼすやうに見えた。

それは大鷗外にちなみものではなかつたらう。勿論それは消極的な鷗外の行状であつた。第一には節制であり中庸である。自己の反省のうちにある家庭的な掟である。たとへば石鹸は価

を問はず良質なものを使用すべし。身体は常に清潔を保てよ。銭湯になど行かずとも、毎日身体の上下の払拭を怠らぬこと。縁に出て、洗面器を置いて、薬罐の湯を注げば足りること。洗面器で腰湯を使つても穢ないとも思はぬ。そこに良質の舶来の石鹸が大に効用を發揮する。人手が省かれる。極端な例ではあるが、これが借家住ひで独身生活をしてゐたころの鷗外の日常生活で、その手順が細やかに説かれてある。わたくしにもその精神がいつしか感染して、時節柄多分に洩れず、同居生活の窮屈さを味はされてゐたをりのことであるが、毎朝洗面の後、鷗外の故智に做つて、身体の上下を摩擦し払拭した。入浴もままならぬ日に當つて、それから生ずる意外な好結果に対し、わたくしは歓喜をおぼえざるをえなかつた。(16)

このような手拭による儀式的身体拭いが行われていたのは、別室であり、風呂(湯殿)ではなかつた。鷗外の家では、ちゃんと湯殿があつたが、長男森於菟(一八九〇―一九六七)の記憶の中でも欠落しているのである。

中庭の砂場の傍には古い井戸があつた。茶の間のつづぎに湯殿があり、相当広い台所と、台所の脇の二階に女中部屋があつた。

父は犬に御飯をやり来る時のほかは台所へ来ないし、風呂にも這入らないから、この辺りには一つも父の思出はない。(17)

これは、今日の日本人の清潔感覚ではとうてい受け入れ難い状態である。当時、悪臭ふんぷんと放つ入浴しない人は、次第に近代化され、清潔を旨とする人が増えるにつれ、減少する傾向にあつたと思われる。

息子の森於菟もこれとまったく同じを事を書いて、証言を裏付けている。

私の父が湯に入らぬ事は有名でこれは書生時代に浴場が不潔だからというので行かぬ習慣になつたのであろうが、家に風呂があるようになってからもそうであつた。朝起床してすぐ夕方役所から帰つてからと二回、狭い日本風の室を洗面所にしてそこには古びた鏡台と座るに足るだけの塵と手拭掛とがあつて、塵の上にはどれも真鍮の金盥と湯沸と大形の口漱ぎがあつた。平常着の父はここにあぐらをかいてまづうがいをして次に湯を金盥にうつして上半身だけ肌をぬいでそれで全身を拭うのである。汚水はすべて皆わきにあるバケツに捨てる。この間に西洋剃刀で顔を剃る事もあるが終始手順がきまつていて一滴の水も塵の外には滴さない。すべて父の頭の中で同様に秩序整然とし

ているのである。母がこれを「お茶の湯のよう」と評したのは正に適切である。つかう手拭は一つで顔を拭くのも股の間を拭くのも同一である。「人が汚いというがおれのからだに汚い所はない」と父自身が書いている通りすこぶる自信の強い男であった。父はこの習慣のために水の不足な戦地などで他人のようにならなかつたそうである。(18)

この階段の下の廊下では役所から帰った父が、花塵を敷いた上に金盥や洗面具一式と、汚れた湯をすてるバケツとを於いて、一滴の水も外にこぼさずに身体を拭う習慣になっていた。(19)

それは大概、鷗外の衛生思想による。特に、留学していたロシアで従軍した陸軍のやり方を踏襲していたと言っている。う。

また、書生時代に、「浴場が不潔だ！」というので、風呂嫌いになった鷗外は、内風呂ができてからも、手拭式を買っていたのはなぜか。また、子供たちに自分の裸体をほとんど見せていない事には何か、意味はないのだろうか。それを羞恥心と呼ぶべきか、はたまた自己韜晦と呼ぶべきか。あるいはそれは幼少のときよりの家風だったのか、礼儀の一部だったのだろうか。

鷗外のこうした不可解な行動は、彼の小説『鷄』（一九〇九）

の中で手拭式入浴として示されている。

婆あさんが立つとき、石田は「湯が取つてあるか」と云つた。「はい」と云つて、婆あさんは勝手へ引込んだ。

石田は、裏側の詰の間に出る。ここには水指と漱茶碗と湯を取つた金盥とバケツとが置いてある。これは初の日から極めてあるので、朝晩とも同じである。

石田は先ず楊枝を使う。漱をする。湯で顔を洗う。石鹸は七十銭位の舶来品を使っている。何故そんな贅沢をするかと人が問うと、石鹸は石鹸でなくてはいけない、賈物を使う位なら使わないと云っている。五分刈頭を洗う。それから裸になつて体じゆうを丁寧まづに措く。同じ金盥で下湯しもゆを使う。足を洗う。人が穢きたないと云うと、己の体は清潔だと云っている。湯をバケツに棄てる。水をその跡に取つて手拭を洗う。水を棄てる。手拭を絞つて金盥を措く。又手拭を絞つて掛ける。一日に二度ずつこれだけの事をする。湯屋には行かない。その代り戦地でも舎營やをしている間は、これだけの事を廃せないのである。(20)

鷗外はまた自伝的小説『半日』（一九〇九）の中で同様の描写を繰り返している。日常の描写において、写実的と言うべきか、はたまた自伝的私小説的記述が豊富と呼ぶべきか。

博士は水指の水を嗽茶碗に取つて、小桶の湯を金盥に取つて、楊枝を使つて顔を洗ふのである。その手続がいかに秩序井然としてゐるので、奥さんが娠に来た頃、お茶の湯をなさるやうだと評したといふことだ。なる程、嗽をしまふと、乾いた手拭で嗽茶碗を拭く。顔を洗つてしまふと、湯をバケツに棄てて、手拭を絞つて金盥を拭いて、それに嗽茶碗を重ねる。更に手拭を絞つて手拭掛に掛ける。楊枝も、櫛も、石鹼も、それぞれきちんと小蓋の上に載せられる。いかにもお茶の湯らしい。(21)

いわば、鷗外の清潔、衛生に関する意識が、西洋で涵養され、また西洋の事物を使つて体得されたために、日本の発展途上の心がけ、また衛生物品では容認できなかったであろう。高価で効果の高い舶来石鹼はその象徴であろうか。

ここでまた、鷗外の実生活を描写した部分としてとかく人の口に上つたのが、妻茂子をモデルにした家内が母峰子をモデルにした姑を毛嫌いして、「丸であなたの女房気取りで、会計もする。側にもいる。御飯のお給仕をする。お湯を使う処を覗く。寝ているところを覗く。色気違いが」と罵る場面である。湯を使っている場面は、手拭で身体を拭つているところであろう。

鷗外が、ピアノをわざわざ外国から輸入して娘に与え、またそ

れとはまった別に娘たちの洋服をドイツやフランスからわざわざ輸入していることを考えると、舶来信奉は相当根強かつたと言わざるを得ない。手拭式身体清潔法もその一つと考えるべきか。

しかし、こんな風に孤独に、禅僧のように、肅々と身を浄めていた鷗外とは裏腹に、家族はもつと悠長で豊かな湯の恩恵に浴していたのである。それは、楽しみでもあつたようである。森茉莉の思い出の中に美しかった母の面貌のみならず、その身体の微細な点にまで及んでいる記述を思い起こさせる。鷗外は、こうした家族の団欒に参加しなかつたものと見える。

青白い皮膚はいつも洗つたばかりように、清かつた。お風呂の時など、痩せ形な白い清らか体を折り曲げて坐り、いつも真新しい手拭いをお湯に浸して、石鹼をすりつけ、大きな眼をぱちぱちとさせながら、手早く形のいい額から、引締つた頬、鼻の下と、ギューギュー洗っている母の姿が、薄暗い湯殿の中に浮んでいるのだつた。(中略) 母は眼をつむつて手拭いを濯ぎ、お湯を代えるとぎぶぶと、顔を洗う。そうすると輝くような顔が、現れた。白い肩にも腕にも、湯の滴が光っている。処女のような小さな乳房にも、綺麗な滴が光っていた。(22)

さらにこのエッセーは続く。そこでは、幸せな家族が、風呂を  
通していつそう磨かれて行く様が描かれていて、美しい。

それは母の次の兄、三雄伯父さんの御婚禮の日だった。やが  
て私は母と、お風呂に入っていた。昼のお風呂は明るくて、お  
湯がキラキラと光り、ざぶんと、ざぶんと、長閑な音を、立て  
た。母やいつもより一層手早く私を洗っている。上等の石鹸の  
匂いがする。床になって来た私は、桶や湯槽に満ちて光ってい  
る湯を、手で掬ったり、ぴちゃぴちゃ敲いたり、した。湯は厚  
く、重くて、敲くと中から持ち上がり、膨れてくるような気  
が、するのだった。そうして白い飛沫が飛び散り、楽しい心  
いよいよ楽しくさせた。白い痩せ形の母と、薄黄色の肌のやっ  
ぱり痩せて小さな私とは、光って揺れている湯槽の中に、沈ん  
だ。<sup>(23)</sup>

鷗外は、高級な石鹸を、恐らく自分が西欧で使っていたのを購  
入して、それで身体を磨いていた。しかし、その石鹸をこの  
ように家族が楽しく使っている、そんな愉快で豊かな経験を共有  
せずにいた。それどころか、不思議なことに鷗外は、そうした家  
族的生活を拒否するように、もっと身体を隠匿し、家族の目にさ  
え触れないように、十分の注意を払っていたようである。

長女の森茉莉（一九〇三―八七）は、『たぐいなき美にみえた軍  
服姿』でこう書いている。

朝から晩まで彼を見ていた。（むろん、夜中に目がさめた時  
もである）それなのに私たちは彼の首の半分から上と、手首か  
ら先と、足首から先しか見たことがない。彼はふるにはいらな  
いで、体をふいていたが、そういう時には障子をしめていたし、  
着がえる時も下の襯衣（シャツ）は脱がなかった。<sup>(24)</sup>

風呂を嫌う、あるいは風呂桶を避けていた鷗外の、その原因は、  
書生時代に経験した汚濁に満ちた銭湯の湯のせいなのか、はたま  
た自身の裸身を晒す事に、人一倍神経質であった鷗外の性質によ  
るものかは不明である。

家族さえみたことの無い身体を、おそらくはそれ以外の人々は  
垣間みる事さえもなかったであろう。

時に「あいつは仙人だから」と言われていたのは、その奇矯  
な行動のみならず、その裸体さえ隠蔽しようとするいささか滑稽  
な姿に理由があったのではなかったのか。

しかし、ずっと後になって森茉莉は、父の手拭式を納得してい  
る。それは、パリで夫のフランス文学者山田珠樹（一八九三―  
九四三）と暮らしてみても分かった事である。

「仏蘭西フランスの人間は（少なくとも私の周囲にいた人間は）入浴を殆どしない。ではどうしているのかというと、水で拭くのである。鷗外流である。欧羅巴ヨーロッパの裸女画ヌードには洗面器を置いて、体を拭いているところがある。ジャンヌ・ダルクにも階段の下に風呂場があったが、使う人間は殆ど無い。手拭に石鹸せっけんをつけてごしごし洗い、ざあざあ湯を被る日本人が考えると、ひどく気持ちの悪い習慣のようだが、巴里で暮らしてみても、彼らがそれで平気な理由がわかった。巴里は空気が乾燥してて垢あかがつき難いにく。そこへ欧米人は皮膚の肌目きめが荒いので、日本人が思う程のことはないらしいのだ。」<sup>(25)</sup>

垢あかがつかないと豪語していた鷗外にとって西欧の風土はぴったりだったのかもしれない。清潔ということから言えば、鷗外が自ら顕微鏡でもって目の中の結核菌を確かめていた姿が連想されるし、また最初の妻赤松登志子の離縁さえも、その咯痰を顕微鏡検査して、そこに結核菌を認めていたからではなかったのか。

## 5 漱石と子規と風呂

友人でも、風呂嫌いといふ風呂好きが分かれることもある。その典型例が、正岡子規と夏目漱石であろう。漱石は、熊本時代の経験から『草枕』一九〇六（明治三十九）年をもものにしたが、そこで

は小天温泉の情景が鮮やかに描かれている。

寒い。手拭を下げて、湯壺たくへ下る。

三畳へ着物を脱いで、段々を、四つ下ると、八畳程な風呂場へ出る。石に不自由せぬと國と見えて、下は御影で敷き詰めた、真ん中に四尺ばかりの深さに掘り抜いて、豆腐屋程な湯槽ゆかを据える。槽かとは云ふもの、矢張り石で畳んである。鉱泉と名のつく以上は、色々な成分を含んで居るのだらうが、色が純透明だから、入り心地がよい。折々は口にさへふくんで見るが別段の味も臭もない。病気にも利くさうだが、聞いて見ぬから、どんな病に利くのか知らぬ。固まより別段の持病もないから、実用上の価値はかつて頭のなかに浮んだ事がない。只這入る度に考へ出すのは、白楽天の温泉おんせん水滑洗凝脂みづなめらかにしてきょうしをあうふと云ふ句丈ただである。温泉と云ふ名を聞けば必ず此句にあらはれた様な愉快な気



図4、夏目漱石

持になる。又此気持を出し得ぬ温泉は、温泉として全く価値がないと思つてゐる。此理想以外に温泉に就ての注文は丸でない。……（中略）



余は湯槽のふちに仰向の頭を支へて、透き徹る湯のなかの軽き身体を、出来る丈抵抗なきあたりへ漂はして見た。ふわり、ふわりと魂がくらの様に浮いて居る。世の中もこんな気になれば楽なものだ。分別の錠前を開けて、執着しじやくの栓張しんはりをはづす。どうともせよと、湯泉ゆせんのなかで、湯泉と同化して仕舞ふ。<sup>(26)</sup>

もちろん、漱石の温泉好きの白眉は、松山の道後温泉を舞台にした『坊ちゃん』であろう。松山の教え子の真鍋嘉一郎証言によると、漱石は「松山なぞへ来たのは、道後の温泉がある故、保養方々教鞭をとるに過ぎまいなどと云われていた。事実先生は、毎日半里の温泉まで通ったものである」(「夏目先生の追憶」岩波書店『漱石全集』、『漱石全集月報』第六号)松山在住時代の漱石は道後温泉でも湯と同化して、湯の愉悦に浸っていたのであろう。(二番町の漱石の下宿から道後温泉までは半里(約二km))

また、太宰治(一九〇九―一九四八)の『花吹雪』(一九四四)によると、

漱石だつて銭湯で、無禮な職人をつかまえて、馬鹿野郎！と呶鳴つて、その職人にあやまらせた事があるさうだ。なんでも、その職人が、うっかり水だか湯だかを漱石にひっかけたので、漱石は霹靂へきれきの如き一喝を浴びせたのださうである。まっば

だかで呶鳴つたのである。全裸で戦ふのは、よほど腕力に自信のある人でなければ出来る藝當でない。漱石には、いささか武術の心得があったのだと断しても、あながち軽忽けいこうの罪に當る事がないやうにも思はれる。漱石は、その己の銭湯の逸事を龍之介に語り、龍之介は、おそれおののいて之こゝを世間に公表したようであるが、龍之介は漱石の晩年の弟子であるから、この銭湯の一件も、漱石がよっぽど、いいとしをしてからの逸事らしい。立派な口髭くちひげをはやしてゐたのだ。<sup>(27)</sup>

また風呂嫌いの子規は、こうまで述べている。(森於菟の論考を見よ！)

自分は子供の時から湯に入る事が大嫌ひだ。熱き湯に入ると体がくたびれてその日は仕事が出来ぬ。一日汗を流して労働した者が労働がすんでから湯に入るのは如何にも愉快さうで草臥くそひれが直るであらうと思はれるがその他の者で毎日のやうに湯に行くのは男にもせよ女にもせよ必ずなまけ者にきまつて居る。殊に楊枝ようじをくはへて朝湯に出かけるなどといふのは墮落の極である。東京の銭湯は余り熱いから少しぬるくしたら善からうとも思ふたがいつそ銭湯などは罷めてしまふて皆々冷水摩擦をやつたら日本人も少し活潑になるであらう。熱い湯に酔よふて熱柿じゆくの

やうになつて、ああ善い心地だ、などといふて居る内に日本銀行の金貨はどんどんと皆外国へ出て往てしまふ。(28)

鷗外の最初の妻赤松登志子との子である森於菟の声に耳を傾けてみよう。

子規ははなはだ無精者であつたと見えて、常に垢を蓄えては根岸の里から千駄木へ運んでその臭氣に奇麗好きの私の祖母を辟易させたらしい。しかし、話に興が乗ると胸から腹の辺が痒くなると見えて右手を深く懐に入れてこするのである。(中略)かくして製造せられる垢の団子を拇指の腹にのせて示指の先で弾くのでそれが対座している父の膝に落ちたり、時としては間にある火鉢に入つて室中に異臭を漲らせたりする。(29)

この無精となんとも言えない異臭には、さすがに鷗外も閉口した事であろうが、その辺り恬然と対座している所も、旧時代らしいし、また鷗外の鷹揚とした所を感じさせる所でもある。

漱石に私淑した芥川龍之介(一八九二—一九二七)は、漱石に反して、風呂嫌いだった。確かに芥川は大の風呂嫌い、めつたに風呂に入らなかつたという。入つたとしても、手ぬぐいは持つていかなかつたようだ。それは、あるいは精神を病んだ後、入浴

の欲求さえ感じなくなつていったせいかも知れない。

実際の龍之介は、風呂嫌いのため垢だらけで、近寄ると臭いがしたそうで、中野重治は「この人は風呂に入らぬのか、実に汚い手をしていた。顔なども洗わないのかも知れない。指の皮膚にもしわが多く、そのしわには黒い垢がたまつていた」(30)、と述べている。神経質な芥川にとつて、手の垢は、いかなる説明ができるのか。あるいは、神経はそうした生活の些事まで行き届かなかつたのかも知れない。

もう一度鷗外に戻つて、彼の生涯を俯瞰してみると、身体の秘匿にも類する事が、彼自身の疾病に見られる。

東大医学部に入學してから、鷗外は肋膜炎のために一時休学せざるをえないほどだった。その痼疾は、しかし、その後もずっと鷗外の身体に宿つていた可能性がある。まず、それは西周の仲人によつて婚儀の整つた海軍中将赤松則良男爵(一八四一—一九二〇)の長女登志子との早すぎる離縁に見られる。長子於菟を得ながら、故あつて離縁したと、後の自紀材料に記している。

登志子は、一八八九(明治三十二)年三月六日十八歳で鷗外に嫁ぎ、翌年九月十三日於菟を生んだ後十一月二十七日離縁された。明治三十三年二月四日「小倉日記」に以下のような記述あり。

嗚呼、是れ我が旧妻なり。於菟の母なり。赤松登志子は、眉目妍好ならずと雖も色白く丈高き女子なりき。和漢文を読むことを解し、その漢籍の如きは、未見の白文を誦すること流るる如くなりき。同棲一年の後、故ありて離別す。<sup>(31)</sup>

晩年に鷗外は、体調不良になっても医者に見せず、自分の本当の病氣（肺結核）を生涯隠し続けた。咳をして痰が出ると、紙で拭い取った痰をまとめて庭の端に出て焚き火で焼いていた。

また主治医の額田晉（一八八六一一九六四、東邦医大創立者）に痰の中の結核菌を（ガフキ）検査されると十段階の中の最悪の第十段階であった。<sup>(32)</sup>

鷗外の生涯を辿ってみる以下のようなことが分かる。

- 一）青年時に肋膜炎罹患。
- 二）自分の眼球の中の結核菌を顕微鏡で確認していた。
- 三）西周仲人の最初の妻赤松登志子が結核であると分かると、離縁した。後に登志子は法学士宮下道三郎と再婚。二人子供をもうけたが、自分と共に三人は結核死。（おそらく鷗外は夫人の喀痰を検査していたであろう。）
- 四）海軍軍医総監高木兼寛（一八四九一九二〇、東京慈恵会医大創立者）との脚氣原因究明に際し、高木が栄養説を唱えたのに

対し、陸軍は日本住居に問題があるとした説を唱え、またその確認のために鷗外はドイツ留学を命ぜられ、生涯、その誤謬を認めなかった。

五）その結果、日清戦争、日露戦争の両方で日本陸軍に大量の脚氣患者、死者が出た。

六）生涯、自分は汚れておらず、垢がないと自負。

鷗外は、こうした人生の誤りを非として、ついにかかる遺言をものにする事になったのではないか。

〈鷗外の遺言〉 大正十一年七月六日

余ハ少年ノ時ヨリ老死ニ至ルマデ一切秘密無ク交際シタル友ハ賀古鶴所君ナリ

ココニ死ニ臨ンデ賀古君ノ一筆ヲ煩ハス死ハ一切ヲ打チ切ル重大事件ナリ

奈何ナル官権威力ト雖、此ニ反抗スル事ヲ得スト信ス

余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス、宮内省陸軍皆縁故アレトモ生死別ル瞬間アラユル外形的取扱ヒヲ辞ス、森林太郎トシテ死セントス、墓ハ森林太郎墓ノ外一字モホル可ラス、書

ハ中村不折ニ委託シ  
宮内省陸軍ノ栄典ハ  
絶対ニ取りヤメヲ請  
フ、手続ハソレゾレ  
アルベシコレ唯一ノ  
友人ニ云ヒ残スモノ  
ニシテ何人ノ容喙ヲ  
モ許サス<sup>(33)</sup>

鷗外は死んで、簡素な墓を三鷹禅林寺に残した。それを見た太宰は、自分の墓もそのように清潔であれと願ったのではなかったか。



図5、太宰 治



図6、鷗外の墓



図7、太宰の墓

## 6 北里柴三郎と風呂、墓

鷗外の墓に似て、太宰の墓も、また、瀟洒で肩書きがない。官位が無いから仕方のないことも知れないが、それは、太宰が生前に鷗外の墓を見て、いたく感動していたからである。それは清潔でさえあった。

うなだれて、そのすぐ近くの禅林寺に行ってみる。この寺の裏には、森鷗外の墓がある。どういうわけで、鷗外の墓が、こんな東京府下の三鷹町にあるのか、私にはわからない。けれども、この墓地は清潔で、鷗外の文章の片影がある。私の汚い骨も、こんな小綺麗な墓地の片隅に埋められたら、死後の救いがあるかも知れないと、ひそかに甘い空想をした日も無いではなかったが、今はもう、気が長縮<sup>いじく</sup>してしまつて、そんな空想など雲散霧消した。<sup>(34)</sup>

一方、鷗外と対立する事少なくなかつた北里は、病原菌を運ぶ害虫やねずみを退治<sup>たいじ</sup>して日ごろから身辺を清潔<sup>せいけつ</sup>にすれば病気は予防できることを人々に教えていた。その上、北里は大の風呂好きで、その病が高じて一九一四（大正二）年に伊東に建築した別荘の庭には、別棟で千人風呂を拵<sup>とぎ</sup>えてしまう程だった。この千人風呂に船を浮かべて、近隣の子供に、恐らくは日本最初の温泉プー



図8、伊東の別荘



図9、伊東の別荘の千人風呂に船を浮かべて上機嫌の北里

ルとしてこの風呂を解放し、そこで泳がせたのである。なんでも豪快なことが好きだった北里らしい振る舞いである。この別荘は、北里逝去後、講談社の野間清治が買い取り、そこに一九三七（昭和十二）年に西洋風の別荘を建てて住んだ。

また、東京麻布の自宅には、その当時珍しかったガス風呂を設えて、日々入浴していたようである。しかし、医学会、伝染病研究所（後に北里研究所創設）の発展に尽力しながら、かつ政治などの積極的に関与していた。その墓には「男爵」の肩書きがつけられている。

皮肉なことに、鷗外が愛用していた手拭と小楊枝について、北里は衛生の観念から以下のように述べている。もちろんそれは鷗外の個人的な問題ではなく、一般的な指導なのであるが、そこに聞くべき言葉がある。

一筋の手拭、一筋のタオルから病気の伝染した例は、数ふるに違なき程沢山あります。誰が拭いたか知れぬような手拭など、迂闊に使用つてはなりません。

小楊枝の事ですが之れを内職にして削るのは、多く下層社会の人です。斯ういふ人の手に依て製造された品には注意を払つて、肺結核でも、癩病でも、梅毒でも、万一の伝染に就て用心しなければならぬ。<sup>(35)</sup>



図10、北里の家のガス風呂復原。東京ガス博物館内。



図 11、北里の墓

衛生の観念に叶うような手拭と小楊枝を、神経質に鷗外は使っていた可能性がある。

また、簡素で清潔を感じさせる鷗外、太宰の墓石と違って、北里の墓石には、墓碑銘として男爵の肩書きが堂々と彫られている。それは、一方では国家のために尽力し、功成り名を遂げた結果であつたらう

あつたらうが、そこに鷗外と北里が生涯、相容れなかつた生き方の違い、世間への眼差しの違いがある。そうした態度の違いが、今日の北里学園の繁栄を象徴的に物語っていると云つても過言ではないだらう。鷗

外は死後の虚飾を望まなかつた。北里は死してなお永遠の名譽を重んじていたと言えるであろう。鷗外にも、また北里にも近かつたジョン万次郎の長男、東大医学部卒業の医学者中浜東一郎が、その日記に北里の死に際して「死してなお宣伝をしている」<sup>(36)</sup>と書いたのは、あながち外れてはいない。

#### おわりに

風呂は、時代時代の変遷を経て今日の銭湯になった。風呂屋は、もう死語に近いかも知れない。各家庭に、内風呂が限りなく普及したからである。しかしたとえば、銭湯にこつ然と現れた富士山の絵は、新しい

太宰は、その短編『富嶽百景』(一九四三)の中で、実際の富士山が、風呂屋のペンキ絵、芝居の書割りのように安っぽく見えて、思わず赤面したように書いている。

当分その天下茶屋に落ち着くことになってそれから毎日いやでも富士と真正面から向き合っていなければならなくなつた。御坂峠は甲府から東海道に出る鎌倉往還の衝に当たつていて北面富士の代表的観望台であると言われここから見た富士はむかしから富士三景の一つにかぞえられているのだそうであるが私はあまり好かなかつた。好かないばかりが軽蔑さえした。あまり

におあつらいむきの富士である。まんなかには富士があつてその下に河口湖が白く寒々とひろがり 近景の山々がその両袖にひっそりうづくまつて湖をかかえるようにしている。私はひとめ見て狼狽し顔を赤らめた。これはまるで風呂屋のペンキ絵だ。芝居の書割だ。どうにも注文どおりの景色で私は恥ずかしくてならなかった。(37)

富士山は、風呂屋の一大ペンキ絵の題材である。そこで人々は、一日の垢を落とし、疲れを癒した。漱石や北里がそうしたように。

しかし、鷗外は、風呂が嫌いだった。同時期に東大医学部に学び、また時期を同じくしてドイツ留学を果たした二人の医学者は、別々の人生を歩んだ。かたや陸軍軍人として、やがて作家として。もう一方は、医学者、医学事業者として縦横無尽に活躍した。伝染病研究所を作り、やがて北里研究所を開設した。それに加えて、慶応大学医学部を創設し、また日本医師会の礎を築いた。男爵になった。一方、鷗外は世俗の勲章を一切拒否した。墓石にもただ「石見人森林太郎之墓」と刻まれているだけだ。

その風呂嫌いの鷗外なのに、東京では上野精養軒から一旦不忍池に出て、北へ歩いてすぐ左手にある、明治の文豪・鷗外ゆかりの宿「水月ホテル鷗外荘」の説明では、このホテルは、鷗外が

「東大医学部を卒業、陸軍軍医となり、ドイツへ留学します。帰国後、二十八歳の時に、海軍中将赤松則良の長女登志子と結婚し、上野花園町の赤松家の持家に住みます。それが当ホテル所有の鷗外荘。ここで「舞姫」をはじめ、「うたかたの記」「於母影」などの作品が執筆されました」場所なのだそうである。

しかも、温泉を売りとしており、鷗外の実際の姿といささかずれていると感じざるを得ない。鷗外と温泉というミスマッチが、当事者には理解されていないまま、ホテルの売りになっているという滑稽が面白い。

人は、誰も鷗外先生が、湯につからなかったなどと思ってもよらないのであろう。



図 12、鷗外タオル

## 〔註〕

- (1) 岡本綺堂『岡本綺堂日記』44-50頁。  
 (2) 式亭三馬『浮世風呂』5頁。  
 (3) 『文藝別冊』(総特集・岡本綺堂)川で書房新社、二〇〇四(平成十六)年四月号、105頁。  
 (4) 岡本綺堂、同前、106頁。  
 (5) 江戸っ子とは、江戸生まれの生粋の住民を指す。三代住まないと、江戸っ子とは言えないという説もある。町人ばかりではなく、武士や借家人なども含む。典型的な江戸っ子は、べらんめえ調でまくしたて(主に職人)、細かい議論は苦手で、細かい事にはこだわらず、意地っ張りや喧嘩早く(「火事と喧嘩は江戸の華」、宵越しの銭は持たない(大火が多く蓄財意識の低下と見栄っ張り、その日暮らし)とされ、蕎麦をつるつる呑み込み、熱い風呂が好きで、商売下手で、正義感溢れる人情家、駄洒落が得意。その典型が夏目漱石描く所の『坊ちゃん』の主人公であるとする考えがある。田舎の「野暮」に対する「粋」などということも江戸住人の誇りとなった。近現代の東京人が持っている矜持と似ていなくもない。明治以降は、「東京っ子」と称された。  
 (6) 岡本綺堂、前掲書、107頁。  
 (7) 同前。  
 (8) 『日蓮御書録内』巻三九より、醒醒老人随筆『骨董集』、207-208頁。  
 (9) 同前、28-29頁。  
 (10) 『花宮三代記』とも言う。足利義持・足利義量父子が将軍であった一四二一(応永二十八)年から一四二五(応永三十二)年までの幕府役人の個人日記である。著者は御供衆の伊勢貞弥とされている。伊勢氏もまた政所と深い関わりのある一族であり、前半部・後半部ともに室町時代

の法制史・政治史に関する貴重な資料である。

- (11) 『年々随筆6』(日本随筆全集、第12巻) 国民図書株式会社、一九二九(昭和四)年122-123頁。  
 (12) 貝原益軒『養生訓』111-112頁。  
 (13) 「思い出草」4 湯屋、『岡本綺堂随筆集』81頁。『江戸と東京』一九三八年四月号所収)  
 (14) これ以降の銭湯の盛衰は以下の如し。  
 第二次世界大戦後、本格的に都市人口が増大すると、至るところで銭湯が建築された。一九六五(昭和四十)年頃には全国で約二万二〇〇〇軒を数えるようになった。  
 東京都では銭湯の利用世帯を調査。一九六四(昭和三十九)年の調査で銭湯を利用している世帯は全世帯の三九・六%。一九六七(昭和四十二年、三〇・三%にまで急激減少。  
 自家風呂(内風呂)が急速に普及したのが分かる。  
 それに伴って銭湯の客数、風呂数が急速に減少したのはやむを得まい。大阪府では一九六九(昭和四十四)年二、五三二軒、二〇〇八(平成二十一年一、一〇三軒まで激減。高度経済成長期以降、風呂付住宅が一般的になったのである。平成期に「スーパージョウ」と呼ばれる入浴施設が次々と開業し、急速に銭湯の利用客、軒数ともにまた減少した。  
 二〇〇五(平成十七)年三月末日における全国浴場組合(全国公衆浴場業生活衛生同業組合連合会) 加盟の銭湯の数は五、二六七。現代では、休業日を利用して演奏会などを開催する銭湯も。閉鎖した銭湯の内装をリノベーション化してカフェや現代美術ギャラリーに改築するなど、建築資産を活かした新しい試みも。  
<http://ja.wikipedia.org/wiki/銭湯>



併せて西洋の風呂の歴史を概観しておくこと以下の如し。

基本的には、人間が汚れた身体を川、泉、湖、海での水浴、沐浴などで浄めたのが最初の風呂の経験であることは、誰にでも得心がいく。

しかし、ギリシャ、ローマにおける風呂の隆盛には瞠目するものがある。「ローマ風呂」(Roman Bath)とは、市民が奴隷の労働により政論、談論に集中できたということであり、あくまで奴隷制に立脚した有閑階級の現出という問題である。確かに、彼らは湯に漬かり、食事をし、談論風発の生活を送ったのである。

ローマ時代に現れてきたのがキリスト教であり、その洗礼(baptism)の儀式が流行した。信仰は、単にその洗礼が水浴と同じ効果をもたらすのみならず、神の祝福を得るとした。また、一旦清浄にされた聖なる身体には、もはや汚れや垢がないということになった。妄信の始まりである。よって入浴が廃れた。特に四世紀のアテネの病疫(plague)により、風呂の習慣が廃れた。毛穴(pore)から害毒が身体に入り、病気になるという俗説が流布したからである。

十四世紀(一三四八)のペスト流行(Black Death)により、(温湯)入浴の習慣が途絶してしまった。要するに、肌を温め毛穴を開くのが一番危険だと言ったことになったからである。

一方で、キリスト教における洗礼(baptism)の効用の宣伝は盛んだった。そして、温水よりも冷水浴の方が推奨された。また、全身浴よりも、半身浴が推奨され、時に身体にタオルを巻き、その上から水を染ませてもらむか叩くというタオル浴(towel bath)が行われた。

十七世紀、英国のスカーパーロ(Scarborough)で海水浴の推奨。同時に、飲用の推奨。淡水での水浴、飲用、海水での水浴とその飲用の四種類が推奨された。

この水療法はドイツでも流行。イギリスの医師シデナム(Thomas Sydenham, 1624-1689)が鉱泉飲用を推奨。その薦めに従い、哲学者・医師ロック(John Locke, 1632-1707)が一日17杯飲用を励行した。もちろん、これは下剤としての使用方法である。

十八世紀から、英国で水治療の大流行。水治療(Hydrotherapy)は、また水療法(hydrotherapy)とも呼ばれた。そうした水治療を施す場所をハイドロ(hydro=hotel)といい、そうした場所の全体を「水治療場所(watering place)」と呼んだのである。

水治療の一部で、大量の水、鉱泉を飲料をすること(Taking the waters)は、つまり体内の毒を大外へ排出するための下剤(prugative)としての役割を果たすことであった。(Tar-Water taking)

十八世紀半ば、ドイツで水治療法が創始。(Sebastian Kneip, bathing machine)

(15) 小堀杏奴「思出」『晩年の父』71-72頁。

(16) 青空文庫 ([http://www.aozora.gr.jp/cards/001055/files/47092\\_41596.html](http://www.aozora.gr.jp/cards/001055/files/47092_41596.html)) 底本：「蒲原有明論考」松村緑、明治書院、一九六五(昭和四十)年三月初版発行、初出：「藝林間歩 第二十一号」一九四八(昭和二十三)年四月

(17) 小堀杏奴、同前、116頁。

(18) 森於菟「子規 緑雨 鷗外の垢」、『父親としての森鷗外』、22頁。

(19) 森於菟「観潮楼始末記」、『父親としての森鷗外』、36頁。

(20) 森鷗外『鶏』、337-338頁。

(21) 森鷗外『半日』、74頁。

(22) 森茉莉「幼い日々」『父の帽子』、20頁。

(23) 同前、22-23頁。

- (24) 森茉莉「たぐいなき美にみえた軍服姿」、316頁。  
 (25) 森茉莉「巴里の銭湯」、『森茉莉エッセー集Ⅲ』、99頁。  
 (26) 夏目漱石「草枕」七、『漱石全集』第2巻、岩波書店、昭和四十一年、464-465頁。  
 (27) 太宰治『母吹雪』（一九四四）、第5巻、346頁。  
 (28) 正岡子規『墨汁一滴』岩波書店、一九二七年、明治三十四年三月六日条、50-51頁。  
 (29) 森 於菟『父親としての森鷗外』筑摩書房、一九九三年、20-21頁。  
 (30) 大学を卒業する頃の中野重治（一九〇二-一九七九）はすっかり文学青年になっていた。その頃の事を書いた『むらぎも』（一九五四）に中野が芥川龍之介を訪ねた情景を書いた所がある。それは芥川のほうから会いたいと言ってやってきたのだった。  
 『「や、いらっしやい、」というなりその上半身を左肩からぐんと折った。長い髪が、ほとんど暗いなかで、やはりはたきを振るようには振られた。』  
 『われわれはもはや古い。思想の上でも感覚の上でも、君らは両方で新しい。』、文章で見たのとも人伝に聞いていたのとも違って、葛飾（芥川）の語り口が才気煥発という風でないことが安吉に重くかぶさってきた。』  
 安吉は、ひどく奇妙なものを目にする。それは瘦せて恐ろしく長い葛飾の手の指だった。その指には長期間風呂にはいらなかった病人や乞食にみられるような垢が黒く縦にへばりついていて、葛飾の食事は粥のように見えた。そして食うというよりすすって飲み込んでいた。  
 「才能として認められるのは、深江君（堀辰雄）と君とだけでしよう」  
 「この人は間違っている。この人はおれのままで、自分を低くしてしまつた。」と安吉は思う。そこには学識と機智とそつのない愛想の良さでたちまち派手な最前線の作家となつた人の姿はなかつた。」（中野重治「よも

ぎも」、中野重治『中野重治集』123頁。）

それからまもなく芥川はみずから命を断つた、。

- (31) 森鷗外「小倉日記」、『鷗外全集』三十四巻、246頁。  
 (32) コッホの共同研究者ドイツ人ガフキー (Georg Theodor August Gaffky, 1850-1918) が提唱した結核菌試験方法。0-10段階までの11段階がある。『結核豆事典』、29頁。  
 (33) 森鷗外『鷗外全集』三十四巻、78頁。  
 (34) 太宰治『花吹雪』、131頁。  
 (35) 北里柴三郎「」、『大日本私立衛生會雜誌』一九一四（大正三）年。  
 (36) 中浜東一郎『中浜東一郎日記』5巻、312頁。（昭和六年六月十四日付）  
 (37) 太宰治『富嶽百景』、126頁。

【文献表】

- 岡本綺堂『岡本綺堂日記』青蛙房、一九八七（昭和六十二年）年。  
 岡本綺堂（千葉俊二編）『岡本綺堂隨筆集』岩波書店、二〇〇七（平成十九年）年。  
 貝原益軒（石川謙校訂）『養生訓・和俗童子訓』岩波書店、一九六一（昭和三十六）年。  
 結核予防会編『結核豆事典』（結核予防新書）財団法人結核予防会、一九七七年。  
 小金井喜美子『森鷗外の系族』岩波書店、二〇〇一（平成十三年）年、一九四三（昭和十八）年大岡山書店初版。  
 小堀杏奴『晩年の父』岩波書店、一九八一（昭和五十六）年。

- 式亭三馬（神保五弥校訂）『浮世風呂』（新日本古典文学大系・86）岩波書店、一九八九（昭和六十四）年。
- 醒醒老人随筆『骨董集』、『日本随筆全集』第十三卷、国民図書株式会社、一九二九（昭和四）年。
- 太宰治（木田元編）『花吹雪』（一九四四）、『太宰治滑稽小説集』みすず書房、二〇〇三年。
- 太宰治『富嶽百景』、『太宰治全集』筑摩書房、一九七五（昭和五十）年
- 中野重治『中野重治集』（現代日本文学全集）筑摩書房、一九七五（昭和五十）年。
- 中浜東一郎『中浜東一郎日記』5巻、富山房、一九九九年（平成七）年。
- 正岡子規『墨汁一滴』岩波書店、一九二七（昭和二）年。
- 森 鷗外『森鷗外作品集』1巻、昭和出版社、一九六九（昭和四十四）年。
- 森 鷗外『鷗外全集』2巻、岩波書店、一九三六（昭和十一年）年。
- 森 於菟『父親としての森鷗外』筑摩書房、一九九三（昭和四十八）年。
- 森 茉莉『森茉莉エッセー集I、II、III』新潮社、一九八二（昭和五十七）年。
- 『文藝別冊』（KAWADE 夢ムック）（総特集岡本綺堂）、河出書房新社、二〇〇四（平成十六）年。